

# 台北の旧制高校を歩いてみよう

絵解き 地図と写真で歩く旧制高校

丹野義彦 (東京大学教養学部心理・教育学部会)

## 日本を知るための台湾散歩

台湾には日本統治時代に建てられたレンガ造りの建物が数多く保存されており、観光客も多く訪れる。旧制高校や旧制大学の建物についても、台湾には驚くほどよく保存されている。ある意味では日本以上かもしれない。それらを訪ねてみよう。台湾を知れば知るほど見えてくるのは日本そのものである。

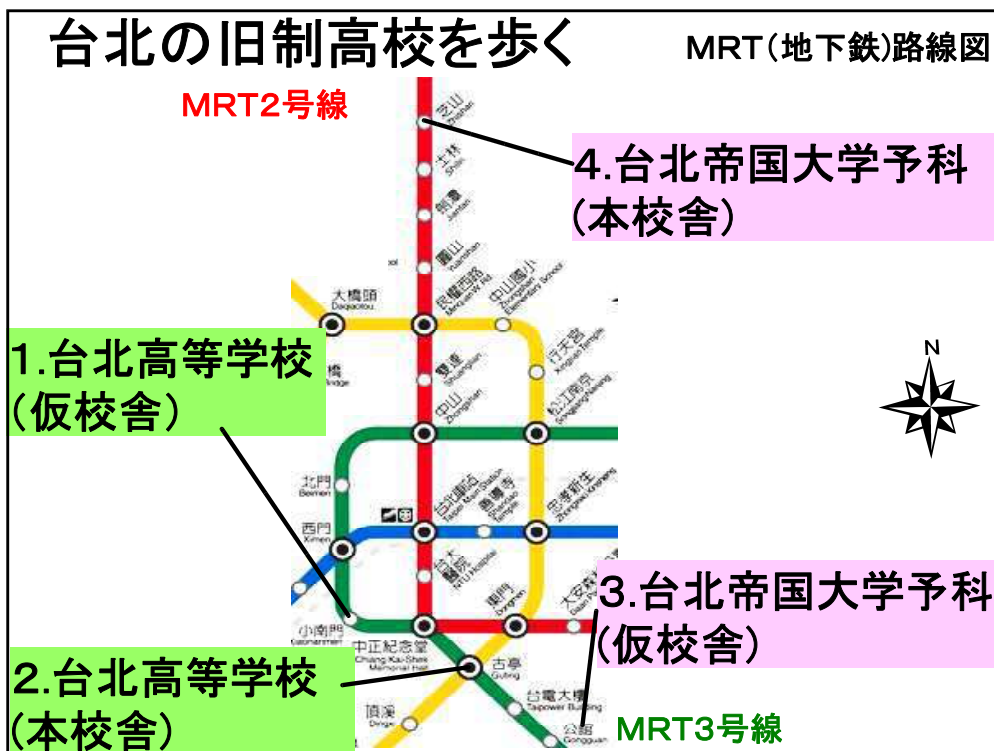
## 台北の旧制高校を歩く

台北には2つの旧制高校が作られた。台北高等学校と台北帝国大学予科である。その跡地をめぐり、地図に示すように4箇所を回ってみる。

	当時の旧制高校	現在の施設	最寄りのMRT
1	台北高等学校 (仮校舎)	台北市立建国高級中学	3号線 小南門駅
2	台北高等学校 (本校舎)	国立台湾師範大学	3号線 4号線 古亭駅
3	台北帝国大学予科 (仮校舎)	国立台湾大学	3号線 公館駅
4	台北帝国大学予科 (本校舎)	軍の施設	2号線 芝山駅

いずれも地下鉄 (MRT) の2号線と3号線を用いて簡単に回ることができる。台北のMRT (Mass Rapid Transit) は非常に利用しやすい。

この4カ所を歩くだけでも台湾の歴史そのものに深く触れることになるだろう。



## 台湾の旧制高校の歴史

下の図に示すように、1895年までは台湾を支配していたのは清朝だったが、1895年～1945年は日本が統治した。この時代に、台湾に住む日本人のための学校 (中学校・高等学校・大学) が作られた。旧制高校は基本的には日本人のための高校であり、台湾人の入学は一部に限られた。

台北高等学校は、1922年 (大正11年) に台湾総督府高等学校として設立され、1927年 (昭和2年) 台北高等学校と改称された。設立当初は本校舎がまだ完成していなかったため、台北第一中学校に間借りして仮

校舎で授業をおこなったが、1926年に本校舎ができて移動した。

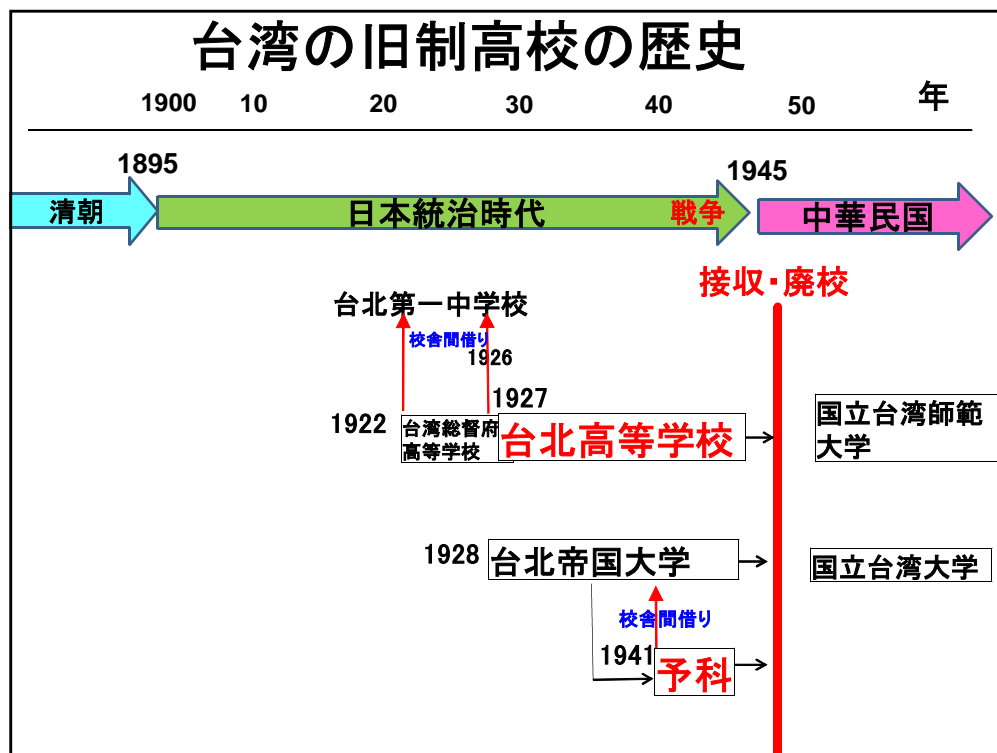
もうひとつ、旧制高校としては台北帝国大学の予科もある。予科とは、大学に進学するための予備教育を行う3年制（のちに2年制）の学校であり、現在の大学教養課程にあたる。教育の内容は旧制高校とほぼ同じだったので、大学予科は旧制高校の一種として扱われる。1941年に台北帝国大学に予科が作られた。

したがって、台北には、台北高校と台北帝国大学予科という2つの旧制高校が並立した。同じ都市に旧制高校と大学予科が同時に並立したのは台北だけであった。

1945年の終戦により、台湾は中華民国の統治となり、日本人は引き揚げ、日本の学校はすべて接收・廃校となった。

以下では、まず、台北高等学校の仮校舎と本校舎を訪ねてみよう。現在は、仮校舎は台北市立建国高級中学が使用しており、本校舎は国立台湾師範大学が使用している。

次に、予科の仮校舎と本校舎も訪ねる。現在は、仮校舎は国立台湾大学となり、本校舎は軍の施設となっている。



## 1. 台北高等学校（仮校舎）

### 1-1. 台北高等学校とは

下の図に示すように、旧制台北高校は、1922年（大正11年）に台湾総督府高等学校として設立された。設立当初は本校舎がまだ完成していなかったため、台北第一中学校に間借りして仮校舎で授業をおこない、初代校長は第一中学校校長の松村傳が兼任した。1926年にやっと古亭町の本校舎ができて移動した。1927年（昭和2年）台北高等学校と改称された。この時の校長が三沢糾（みさわただす）であり、彼が実質的な初代校長と呼ばれることもある。当時は日本で最も南にある高等学校と言われた。1945年の終戦により、中華民国に接收されて廃校となり、23年の歴史を閉じた。

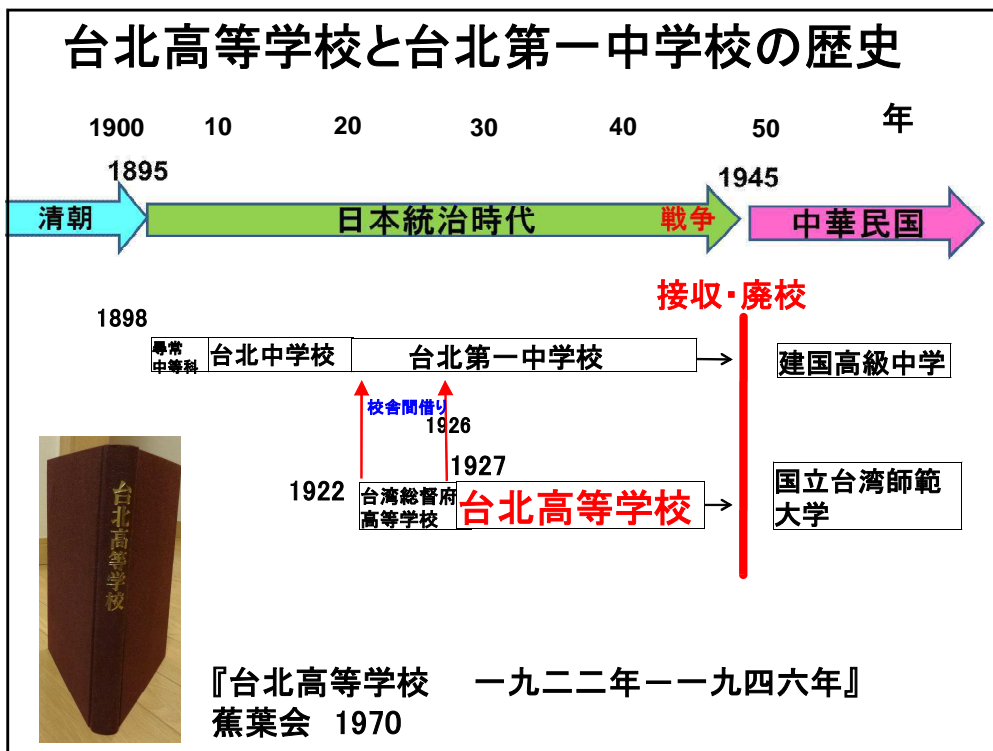
教員として、『次郎物語』や『論語物語』で後に有名になる第3代校長の下村湖人（後述）、万葉集の研究で有名な犬養孝、後に東大教養学部に移り比較文学比較文化のコースを立ち上げた比較文学者の島田謹二などがある。

学生の8割は日本人で、2割が台湾出身者であった。卒業生には、中華民国総統だった李登輝（りとうき）、作家の邱永漢（きゅうえいかん）、学者の上山春平、武谷三男などがある。

1970年に、同窓会である蕉葉会が『台北高等学校一九二二年—一九四六年』を発行した（写真下）。本稿の記述はこれに負うところが大きい。

### 台北第一中学校の歴史

台北第一中学校の歴史を見てみよう。下の図に示すように、この学校は、1898年に、国語学校第四附属学校増設尋常中等科として発足した。後に「台北中学校」と改称され、1922年に台北州立「台北第一中学校」と改称された（建国高級中学校のホームページによる）。つまり、台北高等学校ができた1922年には台北第一中学校となっていた。1945年に中華民国に接收されて廃校となった。台北第一中学校の建物は、1946年から台北建国中学の校舎として使われている。



### 1-2. 現在の台北市立建国高級中学

台北市立建国高級中学は、下の地図のように、MRT 3号線小南門駅から歩いて10分ほどのところにある。

向かいには国立歴史博物館がある。また北側には台北植物園や南海学園がある。また、東側のMRT 3号線（または2号線）中正記念堂駅の方には、二二八国家紀念館や郵政博物館などがあり、これらは「地球の歩き方」にも紹介される観光地である。

現在の台北市立建国高級中学  
 旧台北第一中学校 旧台北高等学校(仮校舎)



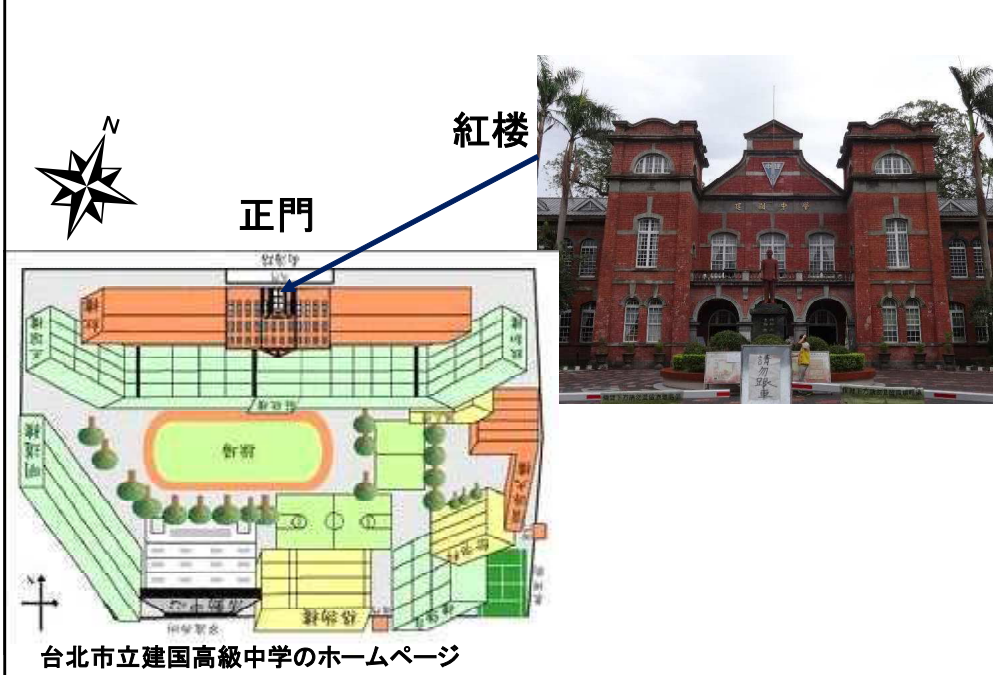
1-3. 現在の建国高級中学に残る台北第一中学校の建物

南海路という通りに面して、建国高級中学校の正門がある。

敷地の中に入ることはできないが、正門を通して3階建ての赤レンガの建物が見える。この建物は「紅楼」と呼ばれている。この建物は、台北中学校時代の1912年に建てられ、100年以上の歴史を持つ。設計者は、台湾総督府技師の近藤十郎である。アメリカ軍の空襲で被弾したが、戦後に修復されたという（『台湾日本統治時代の50年』片倉佳史）。

日本統治時代に台湾総督府によって建てられた学校建築は、赤レンガと白い石材で作られていることが多く、台湾のあちこちで見ることができる（後述）。街を歩いていてもすぐにわかる。

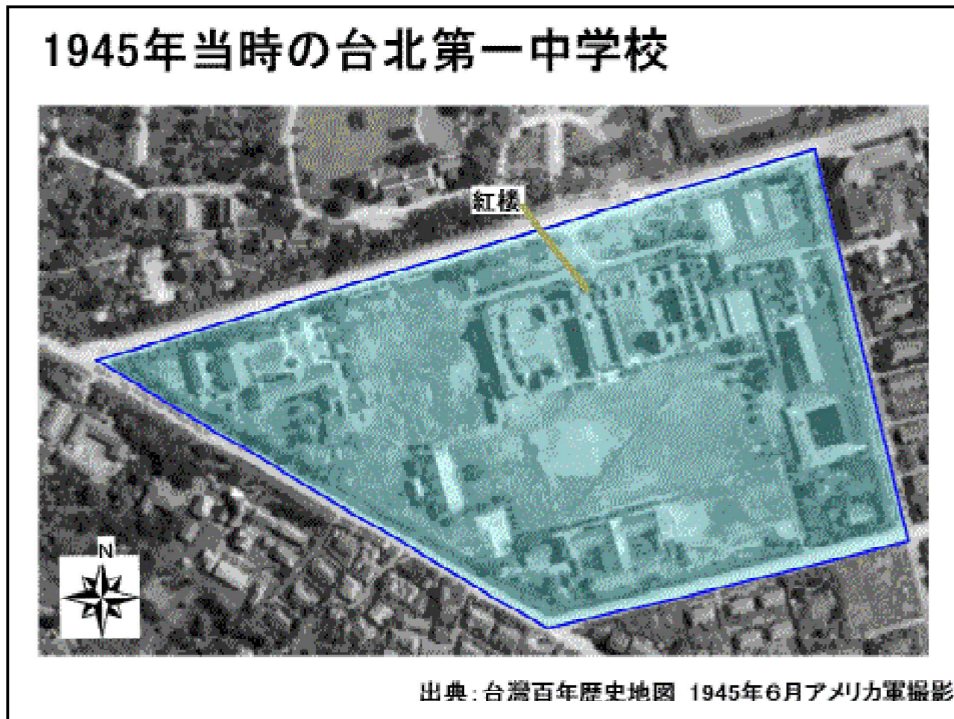
現在の建国高級中学に残る台北第一中学校の建物



#### 1-4. 1945年当時の台北第一中学校

台北高校が間借りしていた時代の台北第一中学校のキャンパスはどのようになっていたのだろうか。当時の配置図を探したが見つからなかった。そこでいろいろな資料を探してみた。

『台湾百年歴史地図』というサイトでは、古い地図と現代の地図を重ねて見られるようになっている。下の図は、アメリカ軍が1945年6月に撮影した航空写真で、台北第一中学校の校舎をみたものである。紅樓の建物が中央にある。



#### 1-5. 紅樓の移り変わり

下の図は、1945年と現在のキャンパスをくらべたものである。

中央のグラウンドを囲むようにして建物が建つ点では、キャンパスの基本構造はほぼ変わっていない。

紅樓の建物は、少し変わったようだ。紅樓は、1945年は、Eの字を右回転して横向きにしたような形をしていた。当時の台北第一中学校の写真を調べると、このことが確認できる。

しかし、現在残っている当時の赤レンガの建物は、正面の紅樓だけのようだ。正面の一の字の部分だけが残っているわけである。

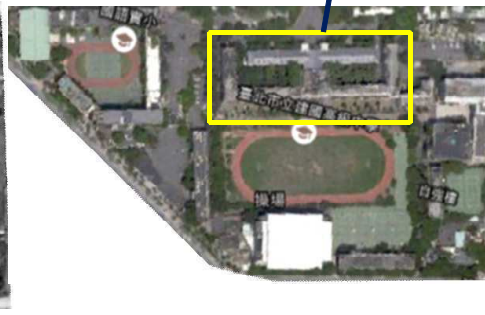
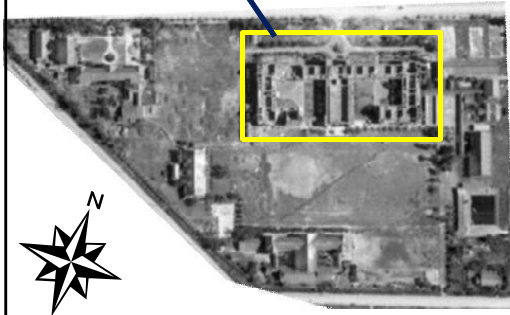
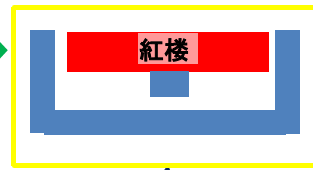
今は、その周りに新しいビルを建てて、古い紅樓の南側を囲むようにしている。ちょうど日の字を横向きにしたような形になっている。

中に入って確かめたわけではないが、建国高級中学校のキャンパスに残る戦前の建物は、正面の紅樓だけのようだ。

# 紅樓の移り変わり

1945年の台北第一中学校

現在の台北市立建国高級中学



出典: 台湾百年歴史地図 1945年6月アメリカ軍撮影

出典: google

## 1-6. 台北高等学校の仮校舎と七星寮はどこにあったか？

台北高校は1922年から26年まで台北一中に間借りしていたが、キャンパスのどこにあったのだろうか。当時の配置図を探したが見つからなかった。そこで、いろいろな資料をもとにして推定してみた。

同窓会の『台北高等学校』には次のように書かれている。

「一中は煉瓦建の広大なものであったが、高校はその一隅に建てられた木造教室の間借りである。」

「校舎は一中のもの物置ですよ。その後ろにテニスコートが三面あって、そのほかには運動するところがないのです。ですから一年二年の生徒殆んど全員がテニスをやりました。校庭イコール・テニスコートだった。先生方も専任ではなく、一中の先生方の兼任が多かったようですね」

ネットで画像を検索してみると、「台湾人 blog」というサイトに、下のような写真が見つかった。撮影時期は不明だが、上の記述にぴったりである。木造の物置のような建物があり、前にテニスコートが三面ある。後ろのほうに赤レンガの紅樓が見える。

アメリカ軍による1945年の航空写真を見ると、キャンパスの北東の部分に、テニスコートらしきものが3面あり、その南に細長い建物がある。左上の写真は、キャンパスの北東から南西に向かって撮影したものと考えられる。紅樓の方向とも一致する。台北第一中学校の広いグラウンドが使えず、テニスコートで運動していたという記述とも合う。1945年の航空写真は、間借りから20年後のものなので、確実とは言えないが、ここが間借りの場所と考えてよいだろう。

## 台北第一中学校の中にできた旧七星寮

また、台北第一中学校のキャンパス内に、1925年、台北高等学校の仮の学寮「七星寮」が建てられた。

同窓会の『台北高等学校』には次のように書かれている。

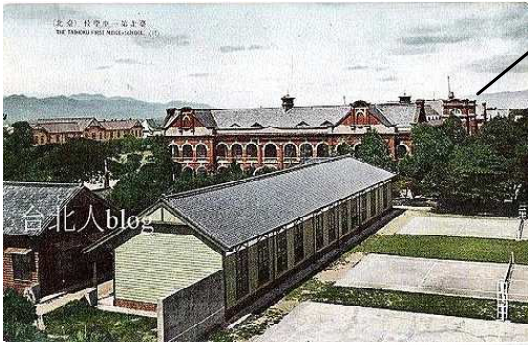
「七星寮は五月三日に開設されています。一中の敷地内にあった四つの寮のうち第三寮と呼ばれていた尋常科の寮と隣り合わせだった。七星寮ができた時、僕らは第三寮にいて隣の様子を眺めていたものです。七星寮史によると、寮は木造の二階建、第一回の入寮生が三十五名で、うち十四名が内地からやってきた連中なんです」(『台北高等学校』29頁)

「大正14年5月3日、この日こそ我が七星寮が誕生の日である。本校が未だ台北第一中学校舎を借用していた頃であるから、寮も仮住居であった。北一中の敷地内にあった四つの寮の中一つを既に尋常科が借用していた訳である。而して新に開設された高等科の寮と云うのは、その四棟の中西南に位置せるもので、従来は四つの寮を各々第一第二第三第四寮と呼んで居り、第三寮と云われている尋常科の寮は廊下を以て高等科の寮に続いていた。名義が仮寄宿舎だけあって、実に貧相な木造二階建の物であった。」(『台北高等学校』384頁)

この七星寮がどこにあったかは不明であるが、1945年の航空写真を見ると、キャンパスの北東の部分に、日の字を横向きにしたような形の建物がある。北側のEの字を横向きにした部分が第一中学校の寮ではなかろうか。ちょうど4棟になる。そして、南側の一の文字の部分が、建て増しされた台北高等学校の七星寮だったのではあるまいか。他の画像を検索すると、確かに南側の部分だけ、仮宿舎のような粗末な造りが写っている写真も見つかった。

台北高等学校が本校舎に移ってから、そちらに堅固な七星寮が建てられ、学生たちはとても喜んだ(後述)。

# 台北高等学校の仮校舎と七星寮はどこにあったか？



紅樓

出典: 台湾人blog

左の写真の  
撮影方向



出典: 台湾百年歴史地図 1945年6月アメリカ軍撮影

## 2. 台北高等学校（本校舎）

### 2-1. 台北高等学校の本校舎

次に、台北高等学校の本校舎を訪ねてみよう。今は国立台湾師範大学として使われている。

下の地図のように、MRT 3号線または4号線の古亭駅で降りて、10分ほど歩く。和平東路一段という通りを東へ行くと、グラウンドが見えてきて、やがて国立台湾師範大学の正門につく。

なお、大学の南東部の龍泉街は「師大夜市」という観光街があり、食べ物屋や店が並び、夜は若者でにぎあう。「師大」というのは国立台湾師範大学のことである。



### 2-2. 国立台湾師範大学のキャンパス

台北の国立大学は、自由に出入りすることができるようなので、ぜひキャンパスを散歩してみよう。

正門には「国立台湾師範大学」と金色で書かれている。正門を入った裏側には、師範大学の学訓「誠正勤樸」が書かれている。

(次の地図から南北が逆になっているので注意。大学のホームページの地図に合わせるためである)

正門を入ると、円形の池があり、広場になっている。正門の広場にはいろいろな芸術的オブジェが置かれている。奥にはペキン大学から贈られたカンフーの像がある。

キャンパスの東側（師大夜市の側）には、大学の学生寮がある。とても古いアパートなので、今の学生はがっかりするかもしれない。



# 現在の国立台湾師範大学



## 2-3. 台北高等学校（本校舎）のキャンパスを復元する

当時の台北高校のキャンパスはどのようなになっていたのだろうか。

キャンパスの平面図を探したが、見つからなかった。そこで、当時の写真を調べて、キャンパスを復元してみた。

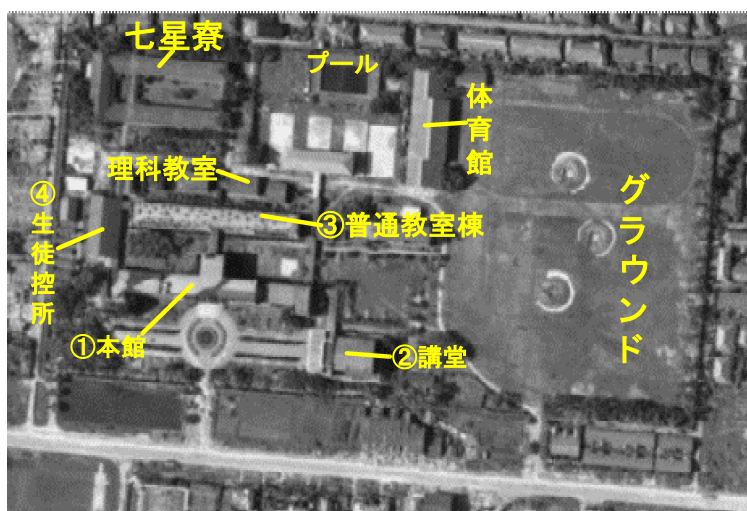
次の図は、1945年6月にアメリカ軍が撮影した航空写真をもとにして、校舎の復元を試みたものである。

以下の4つの建物は、今でもそのまま残っており、大学の建物として使われている。①本館、②講堂、③普通教室、④生徒控室

それより南の方には、理科教室、七星寮、体育館、プールなどがあった。西側には広いグラウンドがある。

前の地図の現在のキャンパスと比べてみよう。基本的な配置はほとんど変わっていないことがわかる。ただし、理科教室、七星寮、体育館、プールなどは取り壊されて新しい建物になっている。

## 1945年当時の台北高等学校(本校舎)



出典:台湾百年歴史地図 1945年6月アメリカ軍撮影

### 2-4. 今に残る台北高等学校の4つの建物を見てみよう

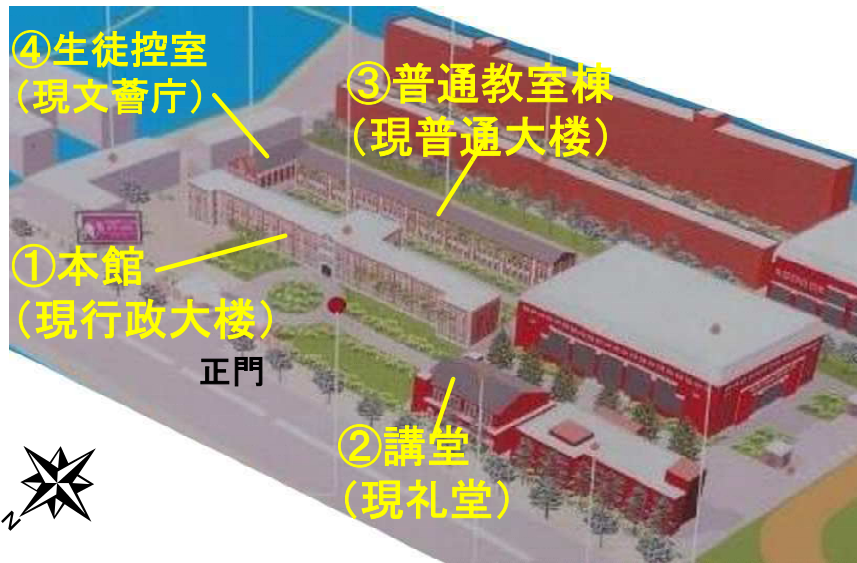
以下の4つの建物は、70年前の建物が現役として使われている。これらの建物を設計したのは、台湾総督府營繕課の井戸薫である。赤レンガと白い石材の組み合わせは、前述の台北第一中学校の紅楼や、後述の台北帝国大学の建物など、日本統治時代の学校建築に共通している。

この4つは台北市「市定古蹟」に登録されており、建物内に説明プレートが貼られている。

以下ひとつひとつ回って、歴史散歩を楽しんでみよう。当時の旧制高校がタイムカプセルのように保存されている。

	台北高等学校時代の建物名	現在の国立台湾師範大学の建物名	完成年	
①	本館	行政大樓	1928年	市定古蹟
②	講堂	礼堂	1929年	市定古蹟
③	普通教室棟	普通大樓	1926年	市定古蹟
④	生徒控室	文薈庁	1926年	市定古蹟

## 国立台湾師範大学に残る旧台北高等学校の建物



国立台湾師範大学のホームページより

### 2-5. 今に残る台北高等学校の建物

#### ①本館（現行政大楼）

正門をくぐり、正面に見える巨大な建物が現在の「行政大楼」（アドミニストレーションビル）である（左上の写真）。これが当時の本館だった。3階建てで、高くはないが、横に広いビルであり、見る者に威圧感を与える。

この学校出身者の作家 邱永漢（きゅうえいかん）は、台北高校は「全国高校の中でももっとも立派な校舎をほこっていた」として、入試を受けた時に「便所がちゃんと水洗になっていて清潔なのに先ず驚き、こんなきれいな便所のある高校に入りたい、と思ったものである」と書いている（『わが青春・旧制高校』篠原央憲 ノーベル書房）。

行政大楼の中に入ると、入口の右側に「市定古蹟」の説明プレートがある（右上の写真）。「台湾師範大学原高等学校校舎 行政大楼」というタイトルで、中国語と英語で説明文がある。

玄関の造りは凝っている（右下の写真）。上にアーチ状の飾りがある。このような意匠はいかにも昭和初期の旧制高校の建物らしい。正面には「上於至善」と金色で書いてあるが、これが旧制高校時代のものか、その後のものかはわからない。

## 旧台北高等学校の建物

### ①本館(現行政大樓)



## 入口にある文化資産の説明プレート



→ 玄関



## 2-6. 今に残る台北高等学校の建物(つづき)

### ①本館(現行政大樓)の内部 1階 行政大樓の中は昭和初期

本館(現行政大樓)の中に入ってみると、大正時代にタイムスリップしたような気になる。

入口のホールには、赤い絨毯がひいてあり、石の柱が4本立つフロアがある(左下の写真)。天井にはシャンデリアが下がっている。両側に本館を描いた古い絵がかけてある。フロアの中央に鏡が置いてあるが、これは今の時代のオブジェである。

建物の両翼に部屋が並んでいる。廊下の上に小さなランタンが架かっており、廊下に沿って続いている(中下の写真)。シャンデリアとかランタンとか、大正時代の意匠である。こうした旧制高校の建物は日本では失われたのに、海外で見事に保存されていたのは驚きである。

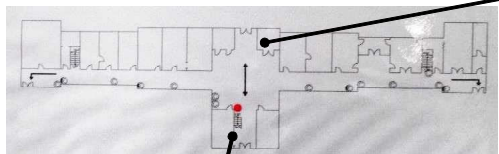
フロアの正面は石の階段である(右上の写真)。手すりやその柱がモダンである(右下の写真)。階段にもランタンがついている。

この建物の1階は教務関係の事務室である。

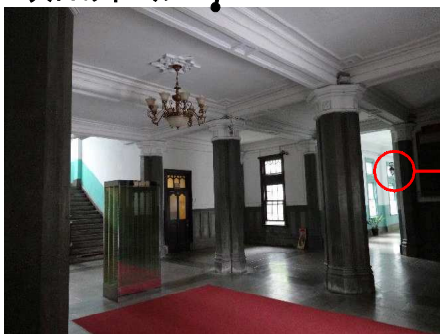
## 旧台北高等学校の建物

### ①本館(現行政大楼) 内部1階

2階への階段



入口のホール



ランタン



階段手すりの模様



## 2-7. 今に残る台北高等学校の建物 (つづき)

### ①本館(現行政大楼)の内部 2階

本館(現行政大楼)の2階に登ってみた。2階には校長室、会議室、応接室などがある。

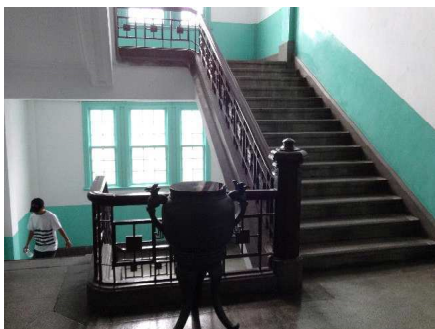
階段を登ると、正面に「会議室」と書かれた部屋がある(右下の写真)。この木の扇は、1階の玄関の造りと相似をなしている。会議室の前にはシャンデリアが下がる。両側の柱は、コリント式のような飾りがついている(左下の写真)。大正時代を感じさせる意匠である。

2階の窓から、中庭が見える(右上の写真)。

## 旧台北高等学校の建物

### ①本館(現行政大楼) 内部2階

2階から中庭を望む



3階への階段



会議室

コリント式のような列柱の飾り



## 2-8. 今に残る台北高等学校の建物（つづき）

### ②講堂（現礼堂）

講堂（現礼堂）は、行政大楼の西にある（左上の写真）。講堂の前の地面に「市定古蹟」の説明プレートがある（左下の写真）。「台湾師範大学 原高等学校校舎 講堂」というタイトルである。

講堂の正面は、立派で凝っている。正門には「礼堂」と金色で書いてある。その横に、師範大学3代目の院長劉真の像が立ち、校訓「誠正勤樸」と書かれている。玄関には入り口に凝った木の扉がある（右下の写真）。間に漢文の板がある。扇の中には入れなかった

右上の写真は、当時の学生が、講堂と本館を前にして撮ったものである（撮影年代は不明）。建物は当時と同じであることがわかる。



## 2-9. 今に残る台北高等学校の建物（つづき）

### ③普通教室棟（現普通大楼）

行政大楼の奥に、普通大楼という長い3階建ての建物がある（左上の写真）。普通大楼は、当時は普通教室棟と呼ばれた。本館と同じデザインだが、こちらの方が新しく見える。

本館からコンクリートの渡り廊下がある（右上の写真）。右下の写真は、この渡り廊下でストームをかけてはしゃぐ学生の姿である。

## 旧台北高等学校の建物

### ③普通教室棟(現普通大樓)



本館から普通教室棟への渡り廊下



出典：臺北高等學校創立90週年紀念活動-白線帽的青春

## 2-10. 今に残る台北高等学校の建物（つづき）

### 「自由の鐘」と初代三沢校長

行政大樓と普通大樓の間の中庭に「自由自治」という鐘がある（右の写真）。

これは、初代校長の三沢糾（みさわただす）がアメリカから移設した「自由の鐘」を復元したものである。三沢は、大正デモクラシーの自由な校風を確立し、学生から慕われていた。三沢はアメリカのクラーク大学心理学科を卒業し、博士号を取得したという経歴を持つ。大阪の中学校の校長となり、そこで、初めて女性教師3人を採用するなど、自由な校風を確立し、後にNHK連続テレビ小説「はっさい先生」に登場する校長のモデルとなったという。1925年に台北高等学校の校長となり、三沢は、「自由の鐘」を米国の農場から移設し、高校の校舎屋上に設置した（左の写真）。戦後も台湾師範大学のシンボルとして学生に親しまれたが破損してしまった。後に有志がこの鐘を復元し、2013年にここに飾られた。

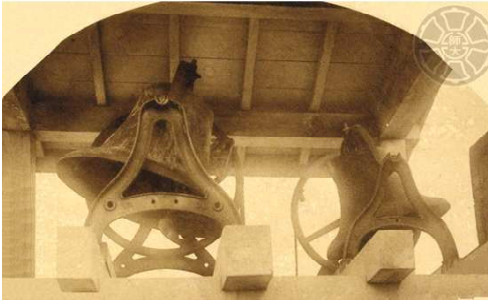
### 学生から嫌われた下村校長

学生から慕われた三沢とは対照的に、第2代校長の下村湖人は嫌われたという。下村は、三沢の後を継いで1929年に第2代校長となったが、学生たちがストライキをおこし、その責任をとって辞職した。その後、彼は教職にはつかず、文筆業に専念し、のちに『次郎物語』や『論語物語』などの作品で有名になった。

## 旧台北高等学校の建物

### 自由の鐘と三沢校長

1929年に三沢校長がアメリカから移設した「自由の鐘」



出典：臺北高等學校創立90週年紀念活動-白線帽的青春

中庭にある「自由自治の鐘」



## 2-11. 今に残る台北高等学校の建物（つづき）

### ③普通教育棟（現普通大樓） 内部

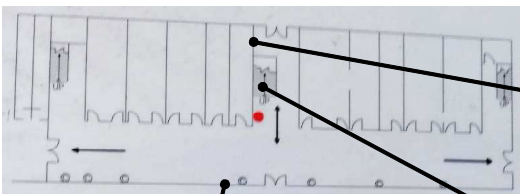
普通大樓の中に入ってみよう。1階に「市定古蹟」の説明プレートがある（右上の写真）。「台湾師範大学原高等学校校舎 普字樓」というタイトルである。

普通大樓は、行政大樓に比べると、ややチャチな造りである。入口のフロアも狭いし、柱はなく、床も石である（左下の写真）。階段の手すりも金属製である（右下の写真）。行政大樓のフロアに見られたような大正時代のモダンな意匠はない。ただし、ランタンは行政大樓と同じ形のものがついている。

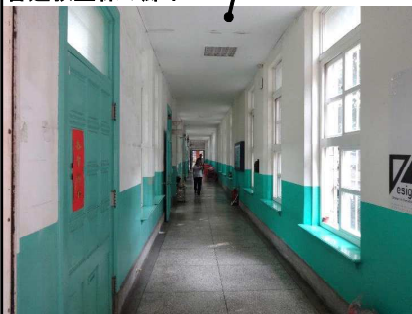
## 旧台北高等学校の建物

### ③普通教室棟（現普通大樓） 内部

入口にある文化資産の説明プレート



普通教室棟の廊下



2階への階段





## 2-12. 今に残る台北高等学校の建物（つづき）

### ④生徒控室（現文薈庁）

行政大楼と普通大楼の東側にある建物が「文薈庁」で、旧制高校時代は生徒控室であった（左の写真）。この建物も台北の市定古蹟に指定されている。現在は、学生福利センターと食堂として使用されている（右の図）。



## 2-13. 七星寮

旧制高校といえば学生寮がつきものである。前述のように、台北第一中学校に間借りしていた1925年に、七星寮という仮の寄宿舍が建てられた。七星の由来は、台北の北にある七星山から来ている。そして、1929年には、移動した本校舎内に「七星寮」が建てられた。右下の写真のように、コンクリート造り2階建てで、当時の学生寮としてはりっぱなものであった。学生たちは本格的な学寮の完成にとっても喜んだ。なお、この建物は現在は撤去されている。

七星寮の中庭には、椰子の木が7本植えてあり、これを囲んで寮歌を歌い踊るのが名物となっていた。左上の写真は、1937年の寮祭で、学生たちが七星寮の中庭で、「台高舞」を踊っているところである。いかにも旧制高校らしいシーンである。

## 七星寮中庭 7本の椰子の周りで「台高踊り」1937年



出典:『白線帽の青春』国書刊行会



出典:台北高等学校創立90周年記念系列活動—白線帽的青春

## 2-14. 台北高校資料室を見よう

旧制台北高校の資料を集めた資料室が公開されている。

台湾師範大学の正門の通りを東に行くと、師範大学のもうひとつのキャンパスがあり、ここに図書館がある。その8階に「臺北高等學校資料室」がある。このホームページには、資料室内のグーグルマップもあり、中を見ることができる。台北高校の歴史や文化をまとめており、関係する物や書籍が集められている。日本語の解説もあるので、わかりやすい。

## 台北高等学校資料室 国立台湾師範大学のホームページ

臺北高等學校  
1922-1957

大事記  
主任校長  
校歌  
臺北高等學校的學生  
自由與自治  
異校・人物・印信  
訪視守紀函件  
00周年紀念冊  
參觀資料室

臺北高等學校資料室

地點:  
臺北市大安區和平東路1段129號(師大圖書館3F)

開放時間:  
星期一至星期五 10:00-12:00及13:30-16:30  
星期六、日不開放

臺北高等學校資料室使用規則

- 一、開放對象: 臺南、臺中、臺南、以及校外人士等自由參觀。
- 二、開放時間: 週一至週五 上午10:00-12:00, 下午13:30-16:30, 例假日不開放。
- 三、本資料室僅供展示之文物, 不提供外借, 請勿攜出。
- 四、採集各界人士捐贈相關文物資料, 請先詳閱《捐贈辦法》。
- 五、如需導覽, 請與於史經室聯絡, 聯絡電話: 7734-5181、7734-5183。
- 六、歡迎參觀, 敬請指教。

GOOGLE 環景

2009 © 國立臺灣師範大學版權所有

### 3. 台北帝国大学予科（仮校舎）

#### 3-1. 台北帝国大学予科とは

台北帝国大学予科は 1941 年に作られた。開校当時は、まだ本校舎がなく、台北帝国大学内に仮校舎を建て、授業がおこなわれた。翌 1942 年に、郊外の芝山巖（しざんがん）に本校舎ができたので移転した。

1945 年大学は中華民国に接収され、予科は翌 1946 年に廃校となった。創立から廃校までわずか 5 年という短命であった。在籍した学生は 1000 名ほどにすぎない（「芝蘭」276 頁）。旧制高校のほとんどは新制大学の教養部に吸収されたのに対して、台北帝国大学予科は後身高がなく、文字通りの廃校である。これは台北高等学校も同じであり、外地の旧制高校の辿った悲しい運命である。

学生はほとんどが日本人であった。台湾人の学生は 1 割ほどだったが、彼らは終戦後は国立台湾大学で学業を続け、社会で指導的な立場に立ったという。

予科の同窓会は活動を続け、創立五十周年を迎え、1994 年に『芝蘭—台北帝国大学予科創立五十周年記念誌』を出版した（左の写真）。本稿の記述はこの記念誌に負うところが大きい。

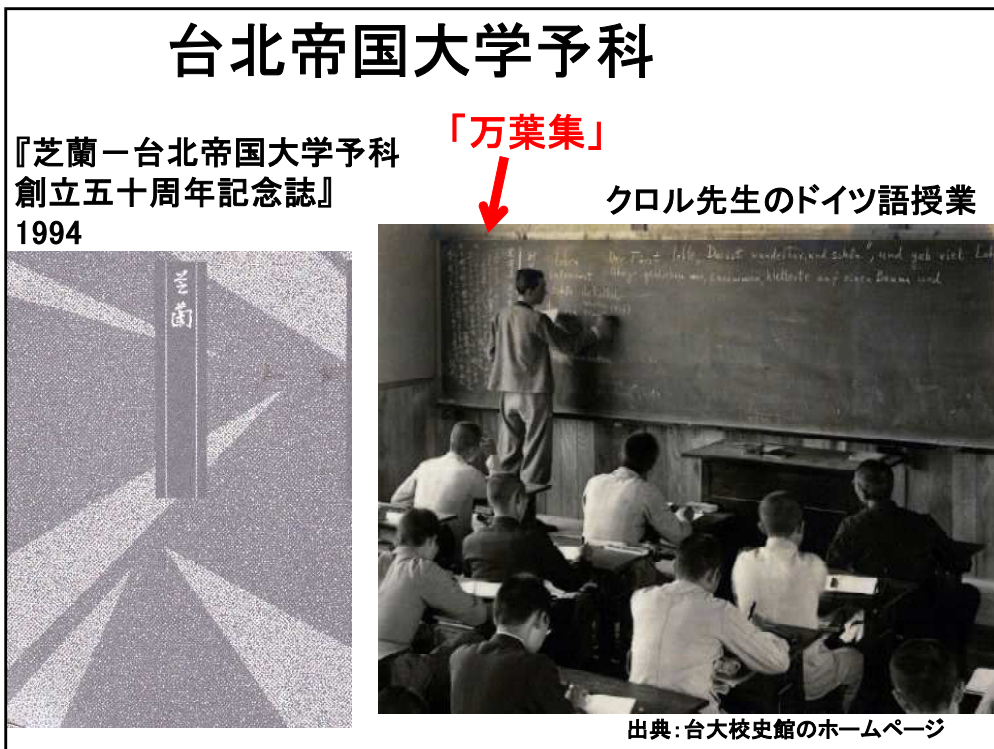
#### ドイツ人クロール先生の「万葉集」の授業

予科の教員の中で、少し変わった経歴を持つのがクロールである。ヴォルフガング・クロール（1906 ~ 1992 年）は、ドイツ生まれで、ブレスラウ大学で理論物理学の博士号を取った。ヒトラーを批判したために亡命し、北海道帝国大学でドイツ語を教えていた。しかし、同盟国ドイツを批判したクロールを内地に留めるわけにいかなくなったので、台湾に移動させられたという。台北帝国大学予科でもドイツ語を教えた（右側の写真）。この写真には、次のような説明がついている。

「教室風景 愛すべきドイツ人のクロール先生 黒板の左端の万葉集なるものは、ドイツ語の発音を日本語で書いたもので、当たった者はそれを読めばドイツ語に訳したことになる。ドイツ人の先生に分ろう筈がない。我々の考えた妙案である。」（『白線帽の青春』国書刊行会 334 ページ）

学生から敬愛された様子が伝わってくる。1945 年に帝国大学が廃校となり、国立台湾大学になると、クロールはその教員となった。日本人の教員が引き揚げた中で、そのまま国立台湾大学に残った例は珍しい。国立台湾大学では理論物理学を担当し、後に教授となった。故国に帰ることなく、生涯独身で通し、86 歳で台北で亡くなった。

出典：張若旭「故 Wolfgang Kroll 先生との五十年」 芝蘭，72-74 ページ



#### 3-2. 台北帝国大学とは

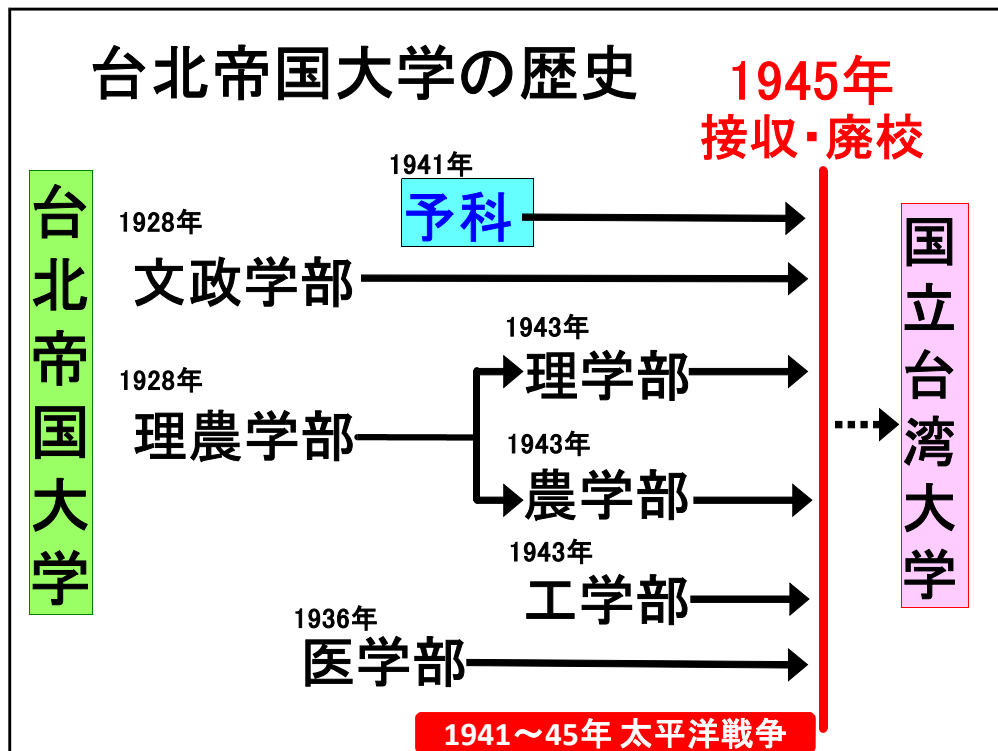
仮校舎のあった台北帝国大学の跡を辿ってみよう。

台北帝国大学は、1928 年に、第 7 番目の帝国大学として作られた。下の図のように、はじめは文政学部と理農学部の 2 つであったが、1936 年には医学部が作られ、その後 1943 年には、工学部ができ、また理農

学部が理学部と農学部に分かれた。

このように学部が増えて募集人員が多くなったので、大学進学者を確保するために、1941年に予科が作られたのである。というのは、当時の台北高校の卒業生は、東京帝国大学など内地の大学にほとんど進学してしまったので、台北帝国大学に進学する人材を確保しなければならなくなったからである。

1945年の終戦により、帝国大学は中華民国政府に接収された。建物と組織はそのまま利用され、国立台湾大学となり、現在に至っている。



### 3-3. 現在の国立台湾大学

下の地図は、現在の国立台湾大学である。MRT 3号線の公館駅で降りると、すぐ前が国立台湾大学である。大学内には自由に入れるので、ぜひ中を散歩してみよう。敷地は広大で、休み時間には、大量の自転車であふれる。写真を撮っていると、あやうくぶつかりそうになった。

西側の校門を入ると、すぐにロータリーがある。そこから、東に500メートルほどの大きな道路「椰林大道」が走る。大道の北側には校史館と文学院がある。大道の南側には1号館、2号館、行政大楼（アドミニストレーション・ビル）という建物がある。

注）ちなみに、大学の外、南側にあるルーズベルト通り（羅斯福路）には学生向けの店が並び、夜は「公館夜市」としてにぎわう。この通りから大学キャンパス内の舟山路はつながっていて、店が並び、市民が出入りしてにぎわう。舟山路の鹿鳴堂というビルには、台湾大学劇場があり、大学ショップとかコンビニが入っている。山崎パンとかCoCo 壺番屋とか日本の店も多い。これほど市民に開かれた大学というのも珍しい。

## 現在の国立台湾大学 (旧台北帝国大学)



### 3-4. 1932年の台北帝国大学の建物

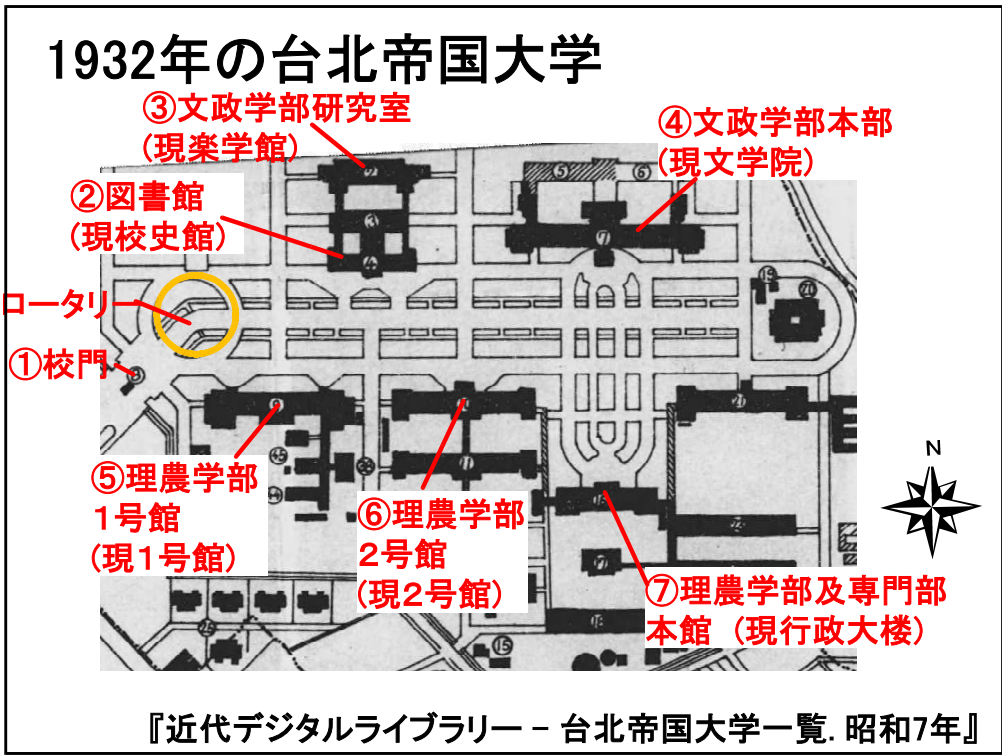
現在の国立台湾大学の建物のいくつかは、戦前の台北帝国大学の時代に作られたものである。

下の地図は、設立当初の1932年の台北帝国大学である。

現在の地図と比べてみよう。ロータリー（黄色い円）を対応させると、ふたつの地図を比べやすいだろう。西側の入口を入ると、①校門がある。ロータリーから、東に大道が走る。大道の北側が文政学部、南側が理農学部である。

大道の北側には②図書館（現校史館）、③文政学部研究室（現楽学館）、④文政学部本館（現文学院）がある。大道の南側には、⑤理農学部1号館（現1号館）、⑥理農学部2号館（現2号館）、⑦理農学部及専門部本館（現行政大楼）がある。

キャンパスの基本構造はこの80年でほとんど変わっていないことがわかる。



### 3-5. 1931年の台北帝国大学 当時のキャンパス

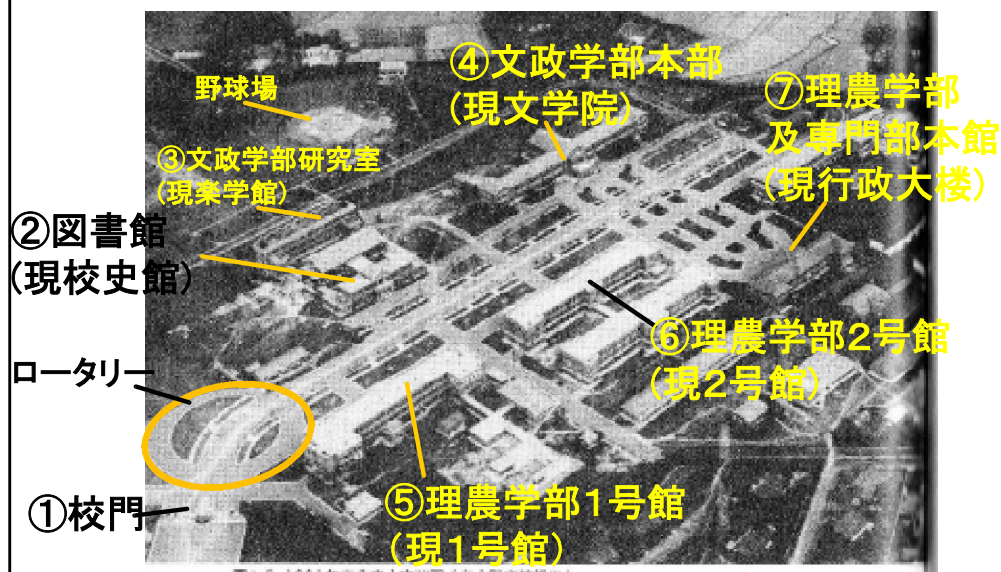
同じ頃のキャンパスを俯瞰したのが次の航空写真である。ここでもロータリー（黄色い円）をくらべると、地図との対応がつく。

現在のキャンパスと比べると、ビルが増えたが、1931～1932年当時のビルは、今でもそのまま建っているのである。

	台北帝国大学時代の建物名	現在の国立台湾大学の建物名	完成年	
①	校門と守衛所	校門と守衛所	1931年	市定古蹟
②	図書館	校史館	1928年	市定古蹟
③	文政学部研究室	楽学館	1928年	
④	文政学部本部	文学院	1928年	市定古蹟
⑤	理農学部1号館	1号館	1931年	
⑥	理農学部2号館	2号館	1931年	
⑦	理農学部及専門部本館	行政大楼	1928年	市定古蹟

これらの建物を設計したのは台湾総督府營繕課長の井出薫である。前述の台北高等学校の校舎と同じである。また、①②④⑦は、台北市の市定古蹟に指定されている。

## 1931年の台北帝国大学



写真出典『台大校園 時空漫步』夏寿九 台大出版中心 2010

### 3-6. 今に残る台北帝国大学の7つの建物を歩いてみよう

国立台湾大学の7つの建物は、昔の台北帝国大学のものがそのまま使われている。戦前の帝国大学がタイムカプセルのように残っている。以下ひとつひとつ回って、80年前の帝国大学を散歩してみよう。

#### ①校門と守衛所

左側の写真は、現在の校門と守衛所である。レンガ造りの建物で、正面に「国立台湾大学」と書いてある。建物上には国旗が立っている。この門の前は、大学広場となっている。

右下の写真は、1942年2月に、予科の工類のクラスが、校門前で撮ったものである。

2枚の写真を比べると、国旗は日の丸から中華民国旗に変わったものの、建物は80年前と同じであることがわかる。

## 旧台北帝国大学の建物 ①校門と守衛所



現在の国立台湾大学校門

校門に集う予科の学生(1942年2月)



出典: 台大校史館のホームページ

### 3-7. 今に残る台北帝国大学の7つの建物を歩いてみよう (つづき)

#### ②図書館 (現校史館)

旧図書館は赤レンガの立派な建物である。表には校史館という看板が出ている。2階にある校史館は、大学の歴史を展示した博物館である (入場無料)。右下の図は、校史館の内部の配置図である。1階には、台湾大学出版会の売店があり、台湾大学のグッズや出版物が置かれている (左下の写真)。

この建物は、どんどん建て増しされて大きくなった。西側には人類学博物館がある (入場無料)。また、この建物には、日本研究センター、日本語文学系、日本語文学研究所なども入っている。

#### ③文政学部研究室 (現楽学館)

旧図書館の北側には、文政学部研究室の建物がある。現在は「楽学館」という名前になっていて、音楽学研究所と芸術史研究所の看板がかかっている (右上の写真)。



### 旧台北帝国大学の建物

#### ②図書館(現校史館)



#### ③文政学部研究室(現楽学館)



#### 台湾大学出版会売店



### 3-8. 今に残る台北帝国大学の7つの建物を歩いてみよう(つづき)

#### ④文政学部本部(現文学院)

文政学部は、予科の教官室が置かれた建物である(後述)。  
現在は、文学院という名前で、リベラルアーツ(教養学部)の建物である。

#### ⑤理農学部1号館(現1号館)

もともと生物学教室の建物として作られた。東側に「植物標本室」があり、自由に見学できる。

#### ⑥理農学部2号館(現2号館)

2号館はもともと理化学教室であり、その南側に3号館(化学校舎)があった。

## 旧台北帝国大学の建物

④～⑥

### ④文政学部本部（現文学院）



### ⑤理農学部1号館(現1号館)



### ⑥理農学部2号館(現2号館)



## 3-9. 今に残る台北帝国大学の7つの建物を歩いてみよう（つづき）

### ⑦理農学部及専門部本館（行政大樓）

理農学部の本部が置かれた。現在は、大学全体の管理棟（行政大樓）として使われている。

旧帝国大学の建物としては、最も美しく、最もよく手入れされている。左上の写真のように、白いコリント式円柱と赤レンガの対比が目立つ。窓枠は水色、屋根瓦は黒と、カラフルである。

行政大樓の前は花壇になっていて、噴水のある池がある（左下の写真）。大道側には「傳鐘」という鐘が立っている（右下の写真）。これは、1949年から学長をつとめた傅斯年（ふしねん）が建てたもので、毎時限ごと21回鳴らされるという。なお、校門の横には、傅斯年学長が作った庭園「傳園（ふえん）」があり、パルテノン神殿風のもので建っている。

ちなみに、台北帝国大学の理農学部の教授として有名なのが磯永吉（いそえいいち）（1886～1972年）である。東北帝国大学を出て、台湾へ渡り、コメの品質改良に取り組み、1930年台北帝国大学教授となった。彼の開発したコメは「蓬莱米」と呼ばれ、台湾の農業発展に大きく貢献した。台湾の人から尊敬され、1945年の終戦後も、彼は請われて農林庁顧問として台湾に残り、蓬莱米の普及につとめた。台湾大学のキャンパスの南は農場になっており、そこに「磯永吉記念室」が設けられている。磯はこの地に1925年に高等農林学校の作業室を作った。平屋の長い作業所が残っており、台北市の市定古蹟に指定されている。隣りに稻香館という建物があり、大学農場で作られた米を売っている。

## 旧台北帝国大学の建物 ⑦理農学部及専門部本館（現行政大楼）

行政大楼



行政大楼の内部



行政大楼の花壇



傳鐘



### 3-10. 仮校舎はどこに建っていたか？

それでは、予科の仮校舎はどこにあったのだろうか？

配置図を探したが見つからなかった。そこで、いろいろな資料をもとにして推定してみた。

予科の教授だった溝辺龍雄氏は次のように書いている。

「昭和十六年六月二十日の人学式を終えてのち、授業が開始された。しかし、予科としての敷地も校舎も、グラウンドもない。ただ文学文政学部の建物の北側の、大学のグラウンドを眼の前にして、右手に銃器庫が、左手に藤棚のある空地に、四教室分の木造瓦葺き平屋一棟の仮校舎がやっと授業開始に間に合ったにすぎなかった。我々教官は文政学部の建物の、仮校舎に近い一室を教官室兼事務室とし、そこから教室に出かけるという有様であった。」

出典：溝辺龍雄「台北帝国大学予科回想－予科の創設とその終焉」 芝蘭、45-55 ページ

また、『芝蘭』には、次のような 1941 年 2 月の新聞記事が引用されている。

「台北予科仮校舎の敷地決定 仮校舎敷地の設置について・・・台北帝大構内の文政学部寄り野球場裏付近に建設。教官室、事務室等一部を文政学部建物内に間借りすることと大体決定をみた」（『芝蘭』49 頁）

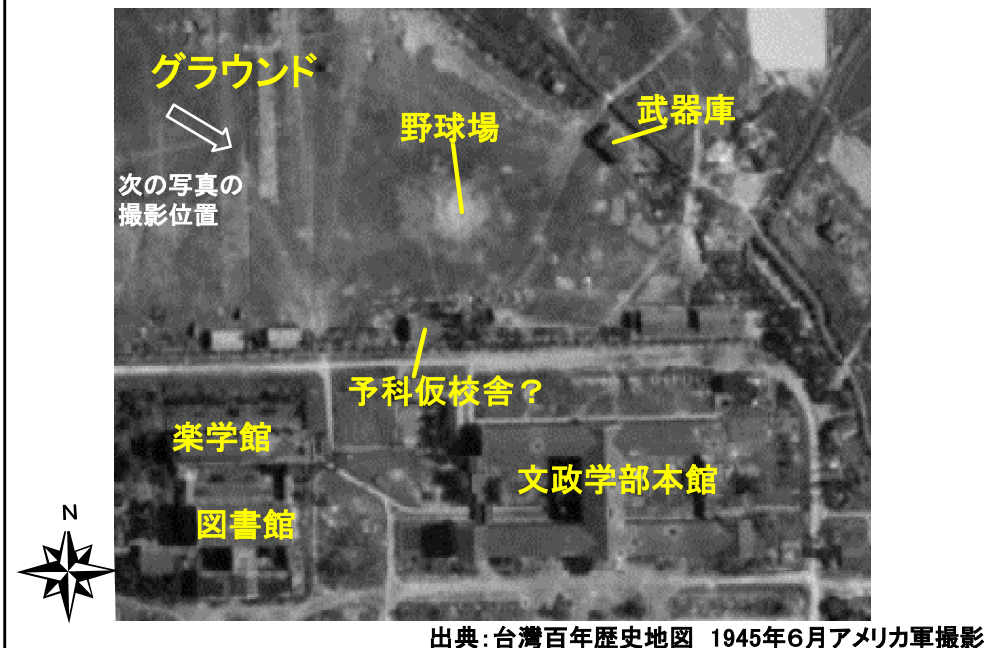
この記事をもとに、1945 年のアメリカ軍の航空写真を調べたところ、下図のように、仮校舎らしい建物が見つかった。仮校舎は 4 教室分の木造瓦葺きというから、この建物とぴったり合う。位置についても、文政学部本館のすぐ北で、野球場の南側にあり、武器庫が右に見える。ただ、藤棚の位置は不明である。

注) 近代デジタルライブラリーのホームページにおいて、各年の『台北帝国大学一覧』が閲覧できる。1940 年までの『一覧』にはキャンパスの地図が折り込まれているので、建物の変化を年ごとに追うことができ便利である。この折り込み地図によって、上の銃器庫（武器庫）と野球場の位置は確認できた。しかし、1941 年からの『一覧』にはこの地図がなくなるので、仮校舎の位置を特定できない。

ただ、1941 年の『一覧』には「予科仮校舎 100 坪」という記述が見つかった。1942 年以降は、この部分が「文政学部仮校舎 50 坪」「工学部仮準備室 50 坪」となっている。つまり、1942 年に予科が移転したので、それ以降は仮校舎を文政学部と工学部で半分ずつ使ったのだろう。100 坪ということは、330 平米、5.5 メートル四方の建物である。上の写真の仮校舎らしい建物は、この大きさの記述とも合う。

その後、仮校舎は、1945～46 年に再使用されたという記録があるので、壊されたわけではなく、この 1945 年の航空写真には写っているはずである（後述のように、芝山巖の本校舎は 1945 年に中華民国軍に接収されたので、予科の教室がなくなってしまった。そこで、予科は再び帝国大学の仮校舎に戻ってそこで 1946 年まで授業がおこなわれたのである）。

## 台北帝大予科の仮校舎 推定位置



### 3-11. 仮校舎らしい建物の写真

予科の仮校舎らしい建物の写真を見つけた。

下の写真は、1942年10月に、台北帝大グラウンドで開かれた台北帝大予科 vs 台北高等学校の対抗運動会の開会式である。

注) 台北には台北高校と帝国大学予科という2つの旧制高校が並立したため、互いのライバル意識は強かったようだ。両校のスポーツ対抗試合には熱が入った。

「台北高等学校との定期戦の際には、「非理法権天」の幟をひるがえし、台湾笠をかぶった予科生がリヤカーに乗せた大太鼓を打ち鳴らし、応援歌を高唱しながら市中を進むと、行人皆人垣を作って見送る有様であった。」(『白線帽の青春』国書刊行会 332ページ)

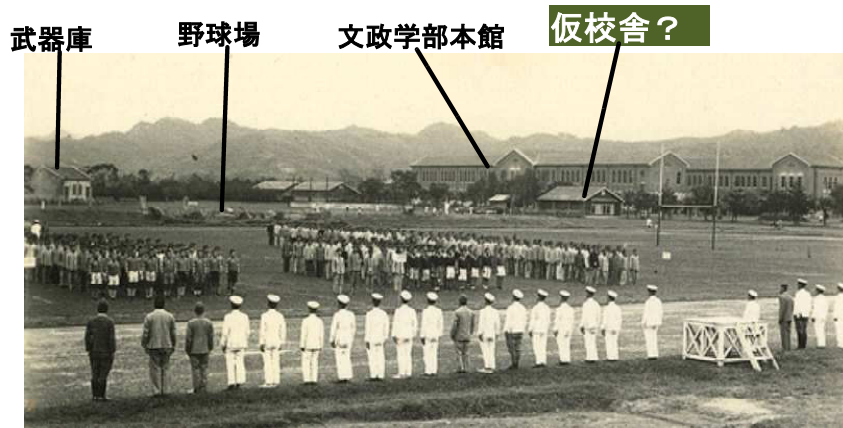
しかし、対抗運動会は1942年と43年の2回だけ行われただけで、戦局が激しくなり中止となった。この写真でも、教官は軍服を着ている。ちなみに42年には台高が勝ち、43年は予科が勝ち、1勝1敗に終わったという。

ところで、この写真の背景を見ると、文政学部本館の建物が見える。左側には武器庫と野球場があり、右側には予科の仮校舎らしい建物が写っている。前の航空写真でいうと、グラウンドから、南東の方角を見ていると思われる。4教室分の平屋木造瓦葺きという仮校舎とぴったり合う。ただ、1942年には予科は移転しているので、この建物は予科の仮校舎ではなくなり、前述のように、文政学部と工学部が半分ずつ使っていただろう。

この仮校舎らしき写真を見て感じることは、当時の学生や教官の失望ではなかろうか。隣の文政学部のレンガ造りの立派な建物にくらべて、平屋木造瓦葺きの仮校舎は何と違うことだろうか。溝辺龍雄氏は、先ほどの文章に続けて、仮校舎のみじめさを次のように書くのである。

「大きな期待と希望と入学のよろこびに胸ふくらませて、台湾各地から、また遙々海を渡って内地から集まった気鋭の生徒諸君の失望と幻滅とは、私もそうであっただけに、ひしひしと感じられた。」(『芝蘭』46頁)

## 台北帝大予科の仮校舎 推定位置



台北帝大予科vs台北高等学校?運動会  
(1942年 昭和17年10月、台北帝大グラウンド)

前の写真の  の方向から撮影したと思われる

出典: 台大校史館のホームページ

### 3-12. 台北帝大予科の仮校舎 現在の位置

仮校舎の位置を現在の航空写真にプロットすると、次の図のようになる。

仮校舎らしい建物は、現在の「普通教学館」の西側に建っていたことになる。現在は芝生の生えた庭になっている。

武器庫だった場所には、現在も同じような建物が建っている。テニスコートの東側、博雅教学館の北側である。方角としては、文学院の真ん中の建物の真北に当たる。現在の大学のキャンパス地図には掲載されていないが、物置などとして使われているのかもしれない。

### 台北帝大予科の仮校舎 現在の配置



出典: google

## 4. 台北帝国大学予科（本校舎）

### 4-1. 3年間だけの本校舎

1942年、台北郊外 芝山巖（しざんがん）のふもとに本校舎ができたので、予科はそちらに移った。

しかし、この校舎が使われたのは3年ほどでしかない。1945年8月に終戦となったが、その間に、予科の校舎は日本海軍に徴用され軍需工場となり、続いて中華民国軍に接收され軍用施設として使われた。このため、予科がここに戻ることはできなくなった。

復員した予科生は、9月から台北帝国大学内のかつての予科の仮校舎に戻って授業を受けた。学内には、「学生は隊伍を組むべからず。学園内を用もなく徘徊するものは射殺することあるべし」という中華民国軍の告示が出されて、学生は愕然としたという（『白線帽の青春』国書刊行会）。1945年11月15日に台北帝国大学は中華民国政府に接收され、この日をもって予科も閉校となった。ただし、日本人の引き揚げが終わる1946年2月まで、予科の授業はそのまま大学で続けられた。

現在、本校舎の跡地は、下の航空写真に示すように、MRT 2号線の芝山駅から東に歩いて15分ほどのところにある。駅から見ると、「芝山公園」の先にある。

予科の跡地は、今でも中華民国軍の情報調査局が使っていて、立入禁止となっている（「芝蘭」P86）。施設の周りには有刺鉄線がめぐられていて、ものものしい雰囲気である。芝山巖の上からキャンパスを見たり（後述の最高点）、インターネットの地図でも建物の配置を見ることはできる。1986年頃には、旧理科教室が残っていたという（「芝蘭」P86）が、今では昔の建物は残っていない。それでも、東西に長い建物が南北に並ぶという構造は、今でも変わっていない。

MRT 2号線の芝山駅の周辺は、旅行ガイドブックではほとんど取りあげられることはないが、日台交流史・教育史においてきわめて重要な場所である。以下では、こうした隠れた歴史遺産に光を当ててみよう。



### 4-2. 学生はどのルートで通学したか

今のMRT 2号線は、当時は淡水線という電車だった。当時は芝山駅はなく、予科の最寄り「士林駅」だった。現在、士林といえば、故宮博物館へのバス乗り場として知られ、近くには士林観光夜市もある。

当時の学生の通学路を復元してみよう。学生は、台北駅から電車に乗り20分で士林駅に着いた（台北発8:18、士林発8:40の電車に通学したという）。士林駅で降りた学生は、地図に示すように、すぐ東側を走る草山街道（今の福林路、迎徳大道）へ出て、北東に向かった。そして、園芸試験所（今は士林官邸という歴史名所）の北側を周り、芝山神社の参道（今は雨農路）に入り、神社の階段前を東に折れて、校舎に着いた。1.5キロメートルほどはあり、歩いて30分近くかかっただろう。

注）これほど遠いので、学生は寮を望んだ。しかし、後述のように、本校舎に学寮が作られかけたものの、途中で終戦となり、完成しなかった。学生の寮へのあこがれと需要は強いものがあったため、予科は、台北市内の「宮前荘」という民間アパートを借り上げて、準学寮と

した。また、学生が民間アパートを借りて、自主的に「不鳴寮」と「無名寮」を運営したという。



### 4-3. 1945年の本校舎の配置

予科の本校舎はどのようになっていたのだろうか。校舎の配置図を探したが見つからなかった。そこで、いろいろな資料をもとに、復元を試みた。

下の航空写真は、1945年6月にアメリカ軍が撮影したものである。黄色の四角で囲んだのが予科の敷地である。東西に長い3本の建物が、南北に並んでいるのがわかる。その東にはグラウンドが広がっている。校舎の北側に写っている建物が何なのかは明らかでないが、あるいは未完成のままに終わった学生寮（後述）なのかもしれない。

校舎や芝山巖のまわりは、水田地帯であることが見てとれる。それほど辺鄙な場所にポツンと建てられたのである。現在の航空写真（ひとつ前の写真）を見ると、芝山巖のまわりは民家で密集しているが、70年前は全く民家のない辺鄙な場所だったのである。

なお、この写真には芝山巖にある芝山神社やその階段、恵濟宮がはっきりと写っている（後述）。

#### 1945年のアメリカ軍の航空写真に写った台北帝国大学予科(本校舎)



出典:台湾百年? 史地圖

#### 4-4. 本校舎の配置を復元してみる

敷地にはどんな建物が建っていたのだろうか。

予科の教授だった溝辺龍雄氏が次のように書いている。

「予科長室、教官室、事務室などが並ぶ棟が一つ、教室棟、理科教室、同実験室および図書館の棟計三棟の他バラックの食堂などが建ち、東側に・・・広々としたグラウンドが設けられた。」

出典：溝辺龍雄「台北帝国大学予科回想－予科の創設とその終焉」 芝蘭，45-55 ページ

また、当時学生だった坂西義洋氏が次のように記録している。

「移転当時は教官室、庶務課、教務課、銃器室、宿直室がある棟と、その北側に並列した教室棟だけで、階段教室と理科実験室がある、やや本格的な建物の建築は少し遅れていた。東側の講堂兼体育室は卒業に関にあったが、奥の学寮は煉瓦を積み重ねたままに終わった。・・・調理場と販売室だけの小屋が山裾にあり、肉なしカレーとカジキどんぶりの二種類のみが売られ・・・」

出典：坂西義洋「士林物語」 芝蘭，84-86 ページ

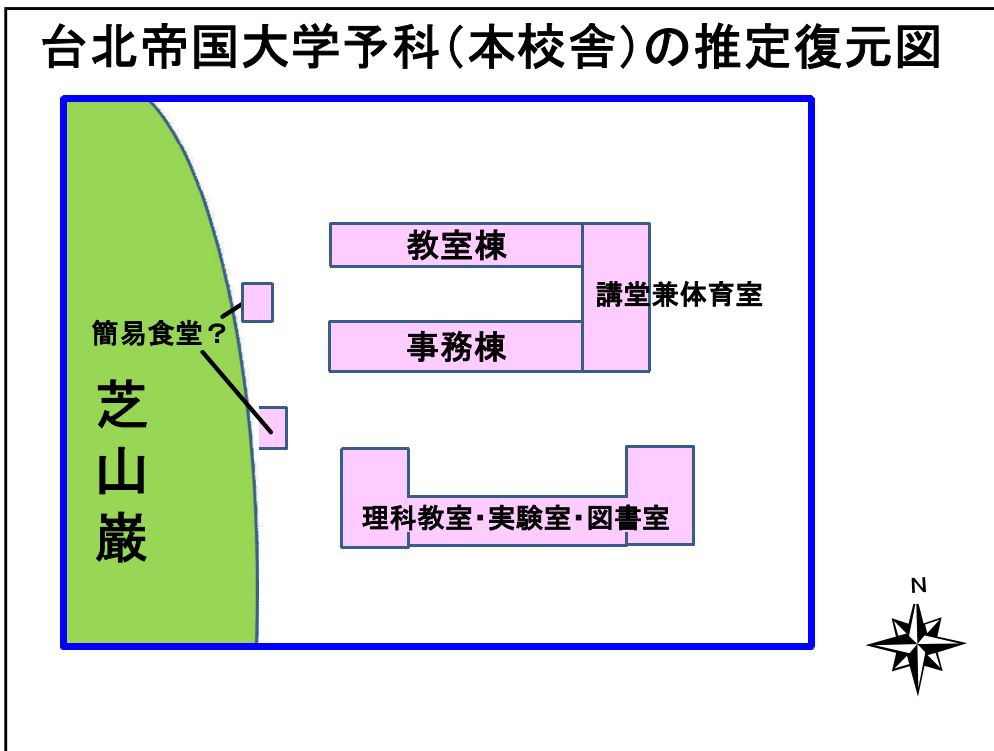
これらを参考にして、校舎の位置を復元してみたのが次の図である。

芝山巖の裾にある食堂の小屋らしいものは2つ写っているが、どちらなのかわからなかった。

なお、坂西氏のいう「煉瓦を積み重ねたままに終わった」という学生寮は、前の写真で校舎の北側に写っている建物なのかもしれない。



## 台北帝国大学予科(本校舎)の推定復元図



### 4-5. 校舎の配置を写真から復元する

校舎の配置について、いろいろな写真（国立台湾大学校史館のホームページ）で確かめたのが次の図である。

#### ①「予科校舎全景」 推定 1943 年

この写真は、北東側から見たもので、校舎の全景をとらえている。屋根の部分拡大してよく見ると、東西に3本の建物があることがわかる。東側は広いグラウンドで、サッカーのゴールらしきものも見える。

#### ②「七星山を後に下校する生徒たち」 推定 1943 年

この写真は、校舎の南西側から見たものである。七星山は、校舎の北東の方向にある有名な山である（前述のように台北高校の学生寮は七星寮と呼ばれた）。この写真の長い建物は、溝辺氏のいう「理科教室・実験室・図書館」であろう。学生たちは士林駅のある南に下校したので、方向も合っている。

#### ③「朝体操」 推定 1943 年

これは「理科教室・実験室・図書館」の建物の東側の室内から、内庭を撮ったものだろう。右側に写るのは事務棟だろう。芝山巖の森の形も合っている。

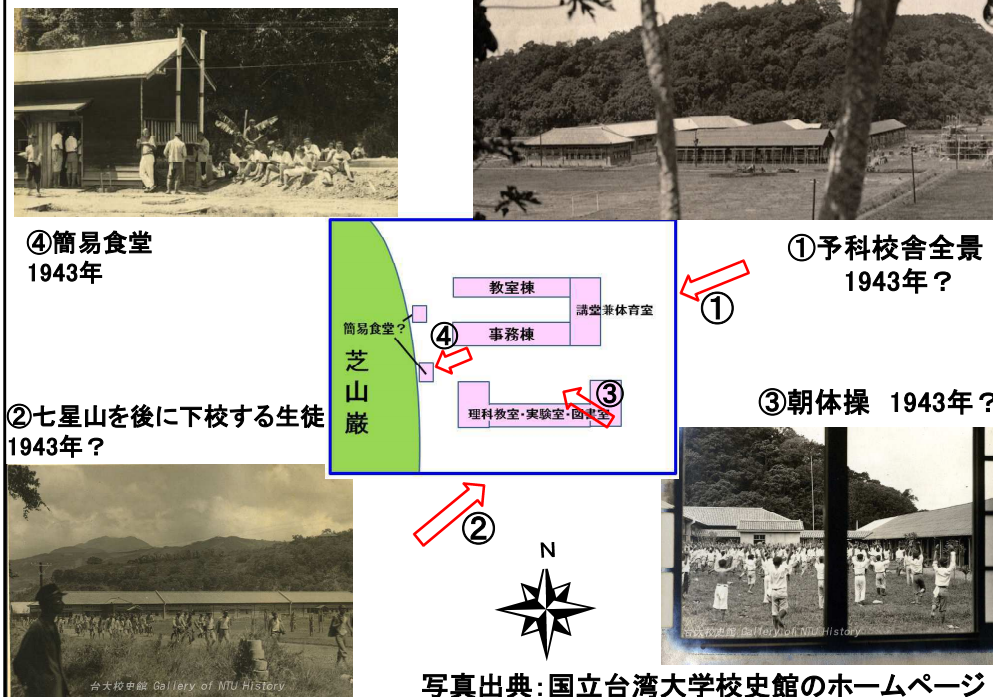
#### ④「簡易食堂」 1943 年

溝辺・坂西両氏は、山裾に食堂の小さな建物があると書いている。これはその写真であろう。前の航空写真には2つの小屋が写っているが、どちらなのかは明らかでなかった。

### 予科の建物の貧弱さ 実質的には仮校舎のまま

こうした写真からわかるのは、建物のみすぼらしさである。台北高等学校や台北帝国大学の立派な赤レンガのビルとくらべると、予科のものは平屋の貧弱な建物である。食堂もなく、学生は食器を持って外で食べている。「本校舎」とは名ばかりで、実質的には「仮校舎」と言ってよいであろう。戦争中で物資がなかったからだろうが、それにしても、予科の学生や教員の落胆が伝わってくるようである。前述のように、台北高等学校出身の邱永漢が、立派な校舎や清潔な水洗便所を見て「この高校に入りたい」と思ったというエピソードとは何と違っていることだろうか。

## 台北帝国大学予科(本校舎)を写真から復元する



④簡易食堂  
1943年

①予科校舎全景  
1943年？

②七星山を後に下校する生徒  
1943年？

③朝体操 1943年？



写真出典:国立台湾大学校史館のホームページ

### 4-6. 芝山巖事件と芝山巖精神

予科の本校舎は、なぜこれほど郊外の不便な場所に作られたのだろうか？

前述のように、校舎のまわりは水田地帯であり、民家もない辺鄙な場所にポツンと建てられた。台北から電車と徒歩で1時間はかかる。ライバルの台北高校が市の南側にあるので、その反対の北側に置こうとしたのかもしれないが、台北高校が市街地にあるのに対し、予科の場所はあまりに辺鄙すぎる。

その理由のひとつと考えられるのは、芝山巖という場所の象徴性である。芝山巖は次に述べるように、台湾を統治していた日本人の心の拠り所であった。

1895年に日本が台湾を統治すると、日本政府は台湾の教育に力を入れた。その中心となったのは総督府学務部長の伊沢修二であった（『日本統治下の台湾の学校教育』林茂生）。彼は、1895年にこの芝山巖の恵濟宮を学務部と定め、「芝山巖学堂」という日本語伝習所を作り、台湾人の日本語教育を始めた（左上の写真）。しかし、翌1896年に伊沢が日本に帰っている間に、台湾人の暴動がおこり、学堂の日本人教師6人は殺されてしまった（左下の写真）。

台湾に戻った伊沢は、この学堂を再開し、この6人（六氏先生）のために「学務官僚遭難之碑」を立てた（後述）。そして、この6人を祀る芝山神社を建てた（右上の写真）。命をかけて教育に当たるといふ「芝山巖精神」は台湾教育界の指針となり、この場所は教育の聖地となった。

戦後になると、一転して、芝山巖事件は、正当な抗日運動とされ、襲った暴徒は抗日運動の義士であり、殺された6人は侵略者の手先とされるようになった。芝山神社は取り壊されてしまった。最近では、こうした極端な動きは弱まり、「六氏先生の墓」も立てられた（右下の写真）。

なお、伊沢修二という人は多方面で活躍した人で、彼と芝山巖事件については、司馬遼太郎が『街道をゆく 台湾紀行』の「伊沢修二の末裔」の中で触れている。

こうした背景を考えると、予科の場所として「芝山巖精神」の地が選ばれたのも不思議ではない。戦局が厳しくなった当時において、政府はこの「芝山巖精神」にあやかろうとしたのかもしれない。太平洋戦争が激しくなるにつれて、予科の学生は勤労働員や徴兵にかり出された。1945年3月には第五期生が入学したが、すぐに生徒と教職員の全員が招集されて、そのまま軍隊に編入された（「芝蘭」P42）。

「予科生はこの六士先生の魂を受け継ぎ、第二次世界大戦では特攻隊を志願し、敵艦に突入したものである。我々はこの闘魂を芝山魂と称した」（『白線帽の青春』国書刊行会 P341）。

追いつめられた予科の学生や教官への同情はますます募るばかりである。

注) 榎取道明とNHK大河ドラマ「花燃ゆ」

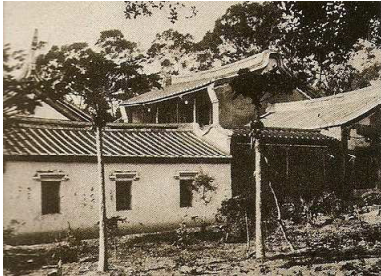
芝山巖事件で殺された6人の中には、榎取道明（かとりみちあき）も含まれていた。

彼は、維新の志士吉田松陰の甥であり、久坂玄瑞の養子であり、初代群馬県令をつとめた榎取素彦（かとりもとひこ）の次男である。2015年のNHK大河ドラマ「花燃ゆ」では、父・素彦（演じたのは大沢たかお）と母・寿（吉田松陰の妹で、演じたのは優香）の間に生まれた久坂条次郎として登場した。彼はのちに久坂玄瑞の家の養子になるが、再び榎取家に戻る。

父の素彦は、政治を引退してからは、後妻の美和（吉田松陰の妹で、演じたのは井上真央）とともに、学校教育に力を入れた。叔父の吉田松陰は傑出した教育者である。父や叔父とともに、道明も教育者の道を進んだわけである。しかし、叔父と同じように、志半ばで殺されてしまう（昔は教育とは命がけの仕事だった）。なお、大河ドラマでは芝山巖事件には触れていない。あまりに暗い話題だからだろうか。

## 芝山巖事件(1896年)

### 恵濟宮に作られた芝山巖国語伝習所



出典:[?] 史回想]日本殖民統治下、台湾教育制度的回顧

### 芝山神社



日本統治時代の芝山巖神社の様子。毎年2月1日に台湾教育会によって慰霊祭が行なわれていたという。奥に学務官俵遺囑之碑が見える。日本統治時代に発行された絵葉書より。

出典：片倉佳史「教育の聖地・芝山巖を歩く」

### 犠牲となった6人の日本人教師



吉長 島中 助之順原井 馬鏡 井平  
那太 金桂 明 道取 堀 照太 長口 園

出典：Wikipedia

### 六氏先生之墓



## 4-7. 芝山巖と予科 旧制高校生の2つの顔

予科の写真を調べていると、芝山巖は頻繁に登場する。

### 芝山巖の石段 1943年

左側の集合写真は、1943年に撮られた。この写真には次のような説明がついている。「芝山巖のきざはしに集う。芝山巖のこの階段を昇ったところは台地となっていて、そこに台湾統治の初期に暴徒に襲われて殉職した六士先生を祭った神社があった。予科生はこの六士先生の魂を受け継ぎ、第二次世界大戦では特攻隊を志願し、敵艦に突入したものである。我々はこの闘魂を芝山魂と称した」(『白線帽の青春』国書刊行会 P341)

どのような機会に撮られたのかは書いていないが、芝山神社への石段（後述）を背景にして、39名の学生が写っている。おそらく予科の1クラス全員で撮ったものだろう。「台北帝国大学予科」というのぼりを立てている。全員が学生帽を被り、学生服やコートを着ている。よくみると下駄を履いている学生もいる。

### 芝山巖の奉納ストーム 1943年2月

右側はストームの写真である。次のような説明がついている。

「芝山巖奉納ストーム。昭和十八年二月末、予科第一回生は、二学期末の試験を終えた日、芝山巖山道に集り、お別れストームを行った。この後内地からきた学友約六十人は敵潜水艦の出没する海を渡って一年ぶりに内地へ帰省したものである。文科生一人が撃沈された高千穂丸に乗っていて犠牲となった。」(『白線帽の青春』国書刊行会 P340)

また、台北大学校史館のホームページでは次のような説明がある。

「ああ、最後のストーム 感激深き若き日の意気と熱とを永久に」

1943年2月の卒業の記念に、1クラスがまとまって最後のストームをおこなったのである。明日にも死ぬかもしれない不安の中でのお別れストームである。重なっていて数えにくいだが、写っている学生は38名か39名である。

前の写真（階段前の集合写真）とこの写真は、気がつきにくいだが、おそらく同じ日に同じ場所で撮られた。2枚はおそらく組写真であろう。

その証拠に、写っている学生数はほぼ同じである。のぼりも同じものだろう。全員が黒い学生帽をかぶっているのも同じである。影の方向や写真の画質も同じである。

階段前では学生服やコートを着ているが、ストームではそれを脱いだのだろう。下駄を脱いで全員裸足になっている。集合写真は階段の下から見上げて撮っているが、ストームの写真は階段の上から撮っている。共通して石灯籠が見える。ストーム写真の遠景の山は、南の剣潭山（けんたんざん）と思われる。

この2枚は、旧制高校生のある方を見事に象徴する興味深い組写真である。旧制高校生の表の顔（学生帽や制服）と裏の顔（ストーム）の両方を表している。旧制高校のエトスを感じさせる青春の写真である。

ここに写っているのは20歳前後の学生なので、現在（2016年）は90歳となっております。ご存命の方も多いただろう。

予科生は、せっかく意欲に燃えて入学したのに、貧しい辺鄙な校舎と長時間の通学路しか与えられず、あげくのはてに軍隊に入れられて青春を無駄にしたが、一方、ストームで青春を燃やした。彼らに対して、つい感情移入してしまう。その感情移入は、比較的恵まれた台北高等学校よりも、不遇な予科生に対してのほうが強いのではなかろうか。旧制高校を直接には知らないわれわれが、旧制高校に強く惹かれてのめり込んでいくのは、こういう瞬間である。

## 芝山巖と予科 旧制高校生の2つの顔

### 芝山巖神社の階段前の予科生(1943年)



予科生による芝山巖奉納ストーム  
(1943年2月)  
「ああ、最後のストーム 感激深き若き日の  
意気と熱とを永久に」



出典: 国立台湾大学校史館のホームページ

## 4-8. 芝山巖に登る 芝山神社

せっかくなので芝山巖を歩いてみることをお勧めする。きっと何か魂に触れるものを感じるはずだ。芝山巖は、現在、芝山公園となっている。

次の芝山公園の地図は、片倉佳史「教育の聖地・芝山巖を歩く」から引用したものである。

### 石段

芝山公園の入口は何カ所もあるが、芝山神社跡への入口は、南東側にある石段である。

入口の石段（右下の写真）は、前の写真とくらべるとわかるように、1943年当時がそのまま保存されている。ただし、前の集合写真に写っていた石灯籠はなくなり、かわりに「芝山公園」という門石が立っている。

入口の階段の横には「百二段」という説明板がある。それで102段かと思いきや、webで調べると125段だという。

石段はあまり急なので、登る場合は、右側にある「歩道」を利用することをおすすめする。歩道の途中に巨大な岩盤が顔を出し、この丘がなぜ「巖」と呼ばれているか、腑に落ちるだろう。

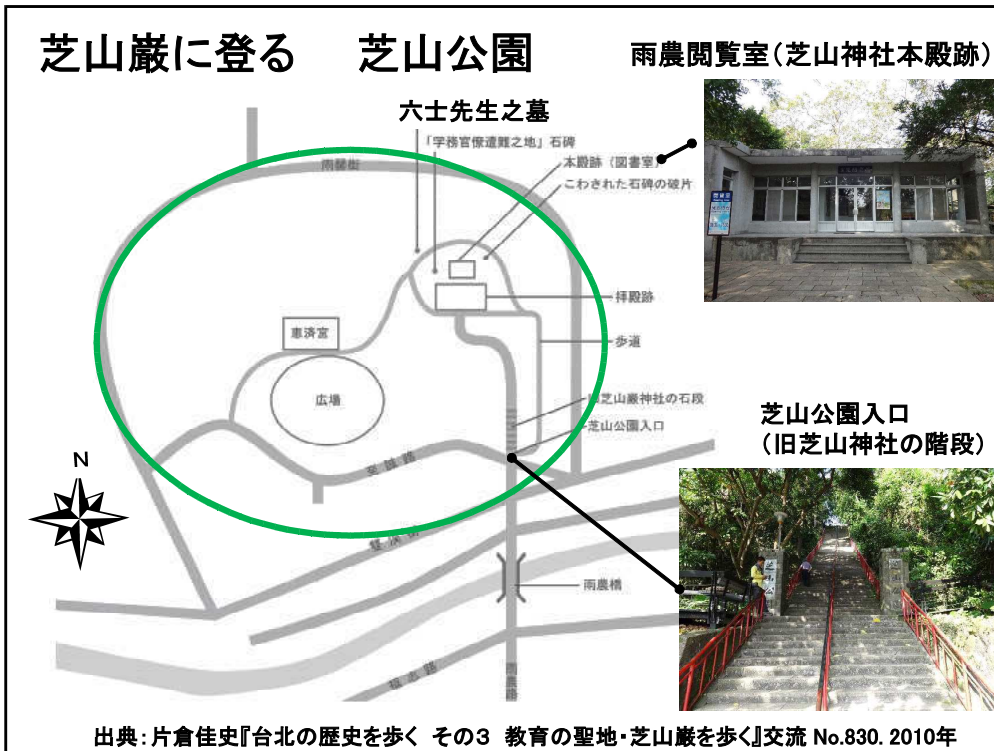
### 芝山神社跡

階段の上のあたりは、芝山神社の跡らしき土台がある。前の写真に出ていたような鳥居や本殿はなくなっている。

### 雨農閲覧室

本殿があったところには「雨農閲覧室」という小屋が建っている（右上の写真）。自由に出入りできる。中国語の本が並ぶ中で、1冊だけ日本語の本（片倉氏の著書）を見つけた。

中に「芝山巖事件」を説明する中国語のポスターが貼ってある。



#### 4-9. 芝山巖事件の跡を歩く

##### 芝山巖事件の碑

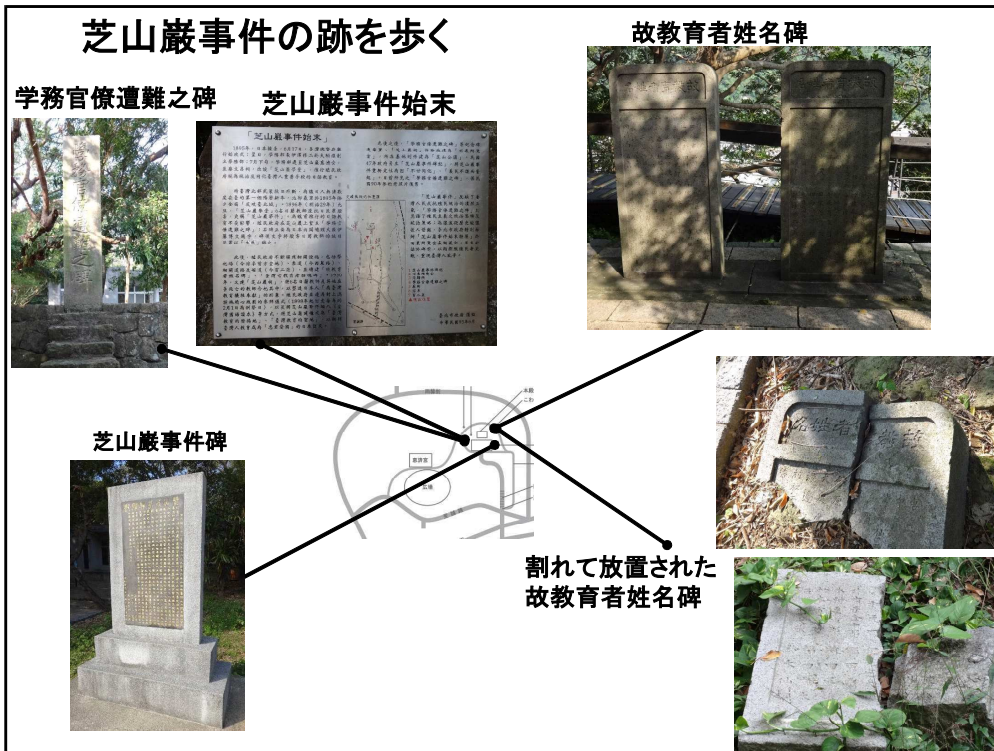
閣覧室の前の左側には、「学務官僚遭難之地」碑が立っている（左上の写真）。この碑文を揮毫したのは伊藤博文である。その横には、日本語の「芝山巖事件始末」という説明板が貼ってあり、地図入りで事件が解説されている（中上の写真）。

閣覧室の前の右側には、中国語の「芝山巖事件」碑が立っている（左下の写真）。

##### 故教育者姓名碑

閣覧室の両側にある歩道を登ると、その奥には「故教育者姓名」碑が2本立っている（右上の写真）。これは台湾で亡くなった日本人の教育関係者の姓名が刻まれている。

その周りには、割れた姓名碑が棄てられ（右中の写真）、石碑の破片が散乱している（右下の写真）。戦後の反日運動によるのだろうか、災害によるのだろうか。日本人の名前が刻まれた石が破片になったまま放置されているのを見るのは、心が引き裂かれる思いがする。宗教心などふだん感じたこともない私だが、他国に来てこのような無残な姿を見るのはつらい。何とかこれらの石を集めて供養してやることはできないものだろうか？



#### 4-10. 芝山巖事件の跡を歩く（つづき）

##### 最高点

歩道をさらに登ると「最高点」がある。芝山巖で最も高い場所である。ここから、予科本校舎だった場所（現在は軍の施設）を見渡すことができる。

##### 六氏先生之墓

歩道を西へ（恵濟宮の方へ）行くと、前述の「六氏先生之墓」がある（右上の写真）。殺された日本人教師6名の名前が刻まれている。歩道の手すりのため墓に近づけないので、小さな字は見えにくい。撮った写真を後で拡大して見たら、六氏の名前であることがわかった。

この墓の周りには、破壊された墓石があちこちに放置されている（右下の写真）。この墓石が、日本人のものかどうかはわからないが、墓石が破壊されたまま放置され、観光客の目にさらされているのは心が痛む。

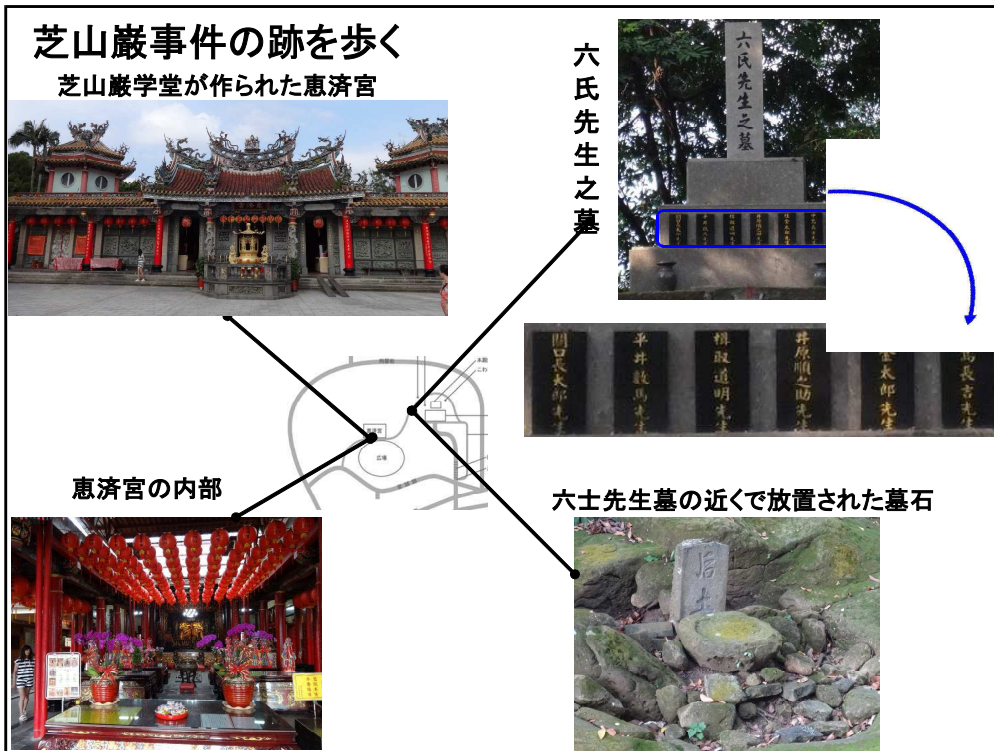
##### 恵濟宮 芝山巖学堂跡

この歩道をずっと行くと恵濟宮というお寺がある（左上の写真）。中は台湾式の派手な極彩色の装飾であふれている（左下の写真）。

恵濟宮の前は広場になっており、その端から見下ろす台北市の景色はすばらしい。司馬遼太郎『街道をゆく 台湾紀行』によると、伊沢修二は、この風景を喜び、「教育の府は眺望のきくところでなければならない」として、前述のように、恵濟宮を学務部と定め、中に芝山巖学堂を作ったのである。台北の街を一望のもとに見渡せるという高揚感が伊沢を惹きつけたのだろう。しかし、それは台湾を統治するという「上から目線」の高揚感であり、それが悲劇の始まりだったのかもしれない。

現在、芝山公園の中には、「芝山文化生態緑園」とか、「考古探抗教室」など教育施設があり、公園全体がテーマパークともなっている。地元の人にとっては観光地となっている。

現地の人にとっては、ここが芝山巖事件の現場であることや芝山神社があったこと、近くに台北帝国大学予科があったことは、ほとんど忘れられているようだ。何とかここに予科の跡地であることを示す石碑くらいは残せないものだろうか。軍事施設なので本校舎内に建てることは無理だとしても、せめて石段の横あたりには建てられないものだろうか。



日本が台湾や中国や朝鮮半島でおこなった侵略や植民地政策の歴史は決して許されるものではない。中国や朝鮮半島では、そうした歴史に対して今でも反日感情が強い。台湾では、戦後の国民党政権のもとでは反日感情は強かったが、最近ではそうした感情も薄れつつあるという。李登輝のような親日の大統領も出てきている。2016年1月の朝日新聞では、戦前の日本統治時代をポジティブな方向で見直す動きが、今の台湾で盛んになっていると報じられた。

台湾に残る日本の建物や鉄道などは、確かに一方では植民地政策という負の側面もあるが、他方で、社会のインフラとして今でも使えるほど頑丈であり戦後の台湾の経済成長の礎となったという正の側面もある。負の側面を自覚した上でならば、台湾の日本統治時代の歴史をめぐるツアーは、きわめて発見に満ち、魂に触れる体験となる。台湾旅行の楽しみはグルメだけではない。冒頭に述べたように、台湾を知れば知るほど見えてくるものは日本そのものである。

使用した写真は、出典を示していないものは自分で撮影したものである。

### ＜参考文献＞

- 『台湾に生きている「日本」』 片倉 佳史 祥伝社新書
- 『台湾日本統治時代の50年：古写真が語る：1895-1945』 片倉佳史 祥伝社
- 『台湾：日本統治時代の歴史遺産を歩く』 片倉佳史 戎光祥出版
- 『台北の歴史を歩く その3 教育の聖地・芝山巖を歩く』 片倉佳史 交流 No.830. 2010年
- 『台北高等学校 一九二二年—一九四六年』 蕉葉会
- 『芝蘭 台北帝国大学予科創立五十周年記念誌』
- 『白線帽の青春（全2冊）—写真図説・旧制高等学校』 国書刊行会 1988
- 『わが青春・旧制高校』 篠原央憲 ノーベル書房
- 『日本植民地における台湾教育史』 鍾清漢著 多賀出版
- 『台大校園 時空漫步』 夏寿九 台大出版中心
- 『街道をゆく 台湾紀行』 司馬遼太郎
- 『地球の歩き方 台北』 ダイヤモンド社

### ＜参考サイト＞

- 台大校史館 Flickr
- 台湾百年歴史地圖
- 近代デジタルライブラリー
- 華麗なる旧制高校巡礼
- 白線帽の青春